【研究ノート】ビュヒマン研究の諸課題

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-01-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐伯, 啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000087

【研究ノート】

ビュヒマン研究の諸課題

佐　伯　　啓

［要約］
ゲオルク・ビュヒマンの『翼のある言葉』を文献学的・編集史的視点から考察する際には，伝記資料の再検討，英仏の先行書との関係も含めた，初期の版の本文分析，そして書評・手紙が改訂作業に与えた影響という 3 つの課題に関する視点がもっとも重要である。ビュヒマン没時の追悼文, およびビュヒマン存命時に彼自身が編集に携わった『翼のある言葉』初期の一次資料の分析はかなり進んできているが,「読者との協働作業」に関わる手紙や書評の収集と分析は今後も継続していく必要がある。

［目次］
はじめに
I.　伝記資料の再検討
II.　初期の版の分析と英仏の先行書との比較
III.　書評・手紙が改訂作業に与えた影響
おわりに

はじめに

この研究ノート[1]は，ビュヒマンという人物および『翼のある言葉』初期の編集史研究における文献学的諸課題を挙げ，今後の研究の見通しとその方向性を示したものである。ビュヒマンの伝記資料の再検討，初期の版の精査と英仏の先行書との比較，そして『翼のある言葉』についての書評や読者からの手紙がビュヒマンの改訂作業に与えた影響等について触れながら，それらの考察がなぜ重要となるかについて，筆者が現時点で明らかにできた部分を踏まえつつ，残された課題を整理しておきたい。

I.　伝記資料の再検討

通常，ゲオルク・ビュヒマン（Georg Büchmann 1822–1884）の伝記資料として用いられ

[1] この論稿は，2023 年 6 月 3 日に明治大学で開催された日本独文学会春季研究発表会で行なった口頭発表「ゲオルク・ビュヒマン『翼のある言葉』初期の編集史」を元に，加筆修正を行なったものである。

るのは『ノイエ・ドイチェ・ビオグラフィー』（„Neue Deutsche Biographie“ 1953～，以下NDB）と『アー・デー・ベー』（„Allgemeine Deutsche Biographie“ 1875-1912，以下ADB）の2冊である。[2] 考察の出発点としてビュヒマンに関する基本情報を共有しておくために，まずNDB（1955年）に記載された内容を引用しておこう。

> ビュヒマンは，まず故郷で神学を学び，次に言語学と考古学を，特に ベック（A. Boeckh）と パノフカ（Th. S. Panofka）に師事した。エアランゲンで博士号を取得し（1845年），フランスに短期滞在したのちにブランデンブルク（ハーフェル）で教師として働き，その後は1854年から77年までベルリンのフリードリヒ・ヴェルデルシュ実業学校に語学教師として勤務した。彼は語学の才能に恵まれ，世界文学にも精通していた。英語とフランス語の引用句に関する著作に触発されて，ビュヒマンはドイツ語の引用句研究に着手した。1864年，彼は『翼のある言葉』（„Geflügelte Worte“）というタイトルで，「ドイツで広く知られ，実際に使われており，その出自が証明できる言葉」を可能なかぎり多く収録した「ドイツ国民の引用句集」を出版した。
>
> この作品は，出版されるや否や予想を超える成功を収め，新版や改版の発行が何度もなされ，家庭になくてはならない一冊となった。ヨーロッパのほぼすべての言語に翻訳され，模倣本も出版された。1872年，彼は教授の称号を得た。[3]

NDBにおけるこのような短い記述に対し，それより約50年前の1903年に書かれたADBでは，NDBに比してより多くの情報が得られる。ビュヒマンが他界したのは1884年なので，その頃はまだ著名な人物としてその名がよく知られていたのであろう。ADBにおけるビュヒマンの項目は，文芸史家のルートヴィヒ・フレンケル（Ludwig Fränkel 1868-1925）によって書かれたもので，ビュヒマンに関係する文献情報もかなり詳しく記されている。NDBでも言及されている諸点，すなわち，ビュヒマンの外国語能力と世界文学の知識，ドイツ語の引用句を収集するきっかけとなった英語とフランス語の先行書についての書誌情報，『翼のある言葉』[4] 出版の経緯，さらにドイツ以外のヨーロッパ諸国への影響に関しても，NDBよりさらに詳しい情報が得られる。特にNDBには見られない記述としては，改訂作業における読者からの協力，さらには『翼のある言葉』というこの書に関する出版当時の書評

---

[2] NDB（全26巻）もADB（全56巻）もドイツ語圏に関わる人物について調べる際には欠かせない基本的事典であるが，数年前からはオンラインで同時に参照できるようになっている。オンライン版のURLはhttps://www.deutsche-biographie.de/

[3] Neue Deutsche Biographie. Bd.2. Berlin 1955, S.719.（以下，引用部分の日本語訳は筆者）

[4] この書について言及する際，本論では『翼のある言葉』または『ビュヒマン』と記す。また，原書からの引用に際しては，G.W.と略記する。

記事への言及が目に留まる。

ビュヒマンの伝記に関して，NDB と ADB 以外の重要な資料としては，ヴァルター・ロベルト-トルノウ（Walter Robert-tornow 1852-1895）が残したビュヒマンへの「追悼の辞」（Nachruf）がある。ロベルト-トルノウは，ビュヒマン没後『翼のある言葉』の編集を引き継いだ人物であり，『ビュヒマン』改訂版（第 14 版）の冒頭に記された追悼の辞は，ビュヒマンに関する最も古い資料と見做されている。この点に関連して，レトケマンは次のように言っている。

> ビュヒマンという人物に関する主な資料は，彼の友人であり協力者であった王室図書館員のヴァルター・ロベルト-トルノウが，1884 年の第 14 版に加えた追悼の辞だけであり，それ以降の版に載せられているビュヒマンに関する伝記は，すべてこの文を基にしている。[5]

こう記したあと，さらにレトケマンは注釈として，ロベルト-トルノウによる追悼の辞は，部分的に ADB にもそのまま取り入れられていると補足している。[6] レトケマンが指摘するように，ADB でビュヒマンの項目を見てみると，参考文献のひとつとして『翼のある言葉』第 14 版（1884 年）に掲載された追悼の辞（S.V-X）が挙げられており，この追悼文はビュヒマンの友人 2 人の協力を得てロベルト = トルノウが執筆したものだと記されている。[7] この友人 2 人とは，追悼文の欄外に記されたロベルト-トルノウの注釈によると，ベルリン実業学校の校長 W. ガレンカンプ（Herr W. Gallenkamp）とリヒターフェルト士官学校のイマヌエル・シュミット（Herr Dr. Immanuel Schimdt）である。[8] 教育学者のガレンカンプ（Wilhelm Gallenkamp 1820–1890）はビュヒマンが勤めていた実業学校の校長であり，もう 1 人のイマヌエル・シュミット（Immanuel Schmidt 1823-1900）はユダヤ人の英語学者で，英独辞典の編集などにも携わっていた人物である。ADB に記されている友人 2 人という記述の根拠も，ロベルト-トルノウによるこの欄外注であると思われる。

ビュヒマンの伝記に関する従来の研究はここまでだったわけだが，そこからさらに一歩考察を進めようと思えば，ロベルト-トルノウが依拠したとされるガレンカンプとイマヌエル・シュミットによる資料が残されているかを調べてみたくなる。この調査には長い時間を要し

---

[5] Peter Letkemann : „Voll weiser Sprüch“ - Georg Büchmann Zum 150. Geburtstag des Schöpfers der „Geflügelten Worte“. In : *Mitteilungen des Vereins für die Geschichte Berlins*. 68. Jahrgang. Nr.5. 1. Jan. 1972, S.109.

[6] Letkemann, P., S.109.

[7] ADB., S.324.

[8] Robert-tornow, W. : Nachruf. In : *G. Büchmann : Geflügelte Worte.* Berlin. 1884, S.VI.

たが，この二人に関係のありそうな資料を端から調べていくうちに，追悼の辞の中でロベルト-トルノウが直接引用している部分と同一の文言を含む資料を運よく見つけることができた。ガレンカンプの方は，彼が校長をしていた実業学校の年次報告書に収められた文章であり，イマヌエル・シュミットの方は，『現代言語研究論叢』（Archiv für das Studium der Neueren Sprachen und Litteraturen）という文芸雑誌に掲載されたビュヒマンへの追悼文である。これらの新資料が加わることで，ビュヒマン研究への新たな視点が生まれてくる。

II.　初期の版の分析と英仏の先行書との比較

『ビュヒマン』について論じる際の基本的前提として，まずどの版を用いるかという問題がある。これが第二の課題である。『グローサー・ビュヒマン』（„Großer Büchmann“）と呼ばれる正規のオリジナル版だけでも 1864 年の初版から 2007 年刊行の 43 版まで存在し，しかもそれぞれの版の編者は時代ごとに変化しているからである。ビュヒマンに関する従来の研究は，戦後に出版された第 30 版以降の版を用いていることが多く，1800 年代後半に刊行された最初期の版にまで遡って言及していることは稀である。ビュヒマン自身が編集したのは初版から第 13 版までだが（図 1），その 13 冊だけを見ても，各版の中身は版が改訂されるたびに大きく変化している。初期の版の考察なしには『ビュヒマン』について本格的に論ずることは困難なのである。

『翼のある言葉』初期の版 13 冊の量的分析から明らかとなるのは，まず収録されている引用句数の変化である。初版に収録されている全引用句 750 の言語別内訳は図 2 のとおりである。

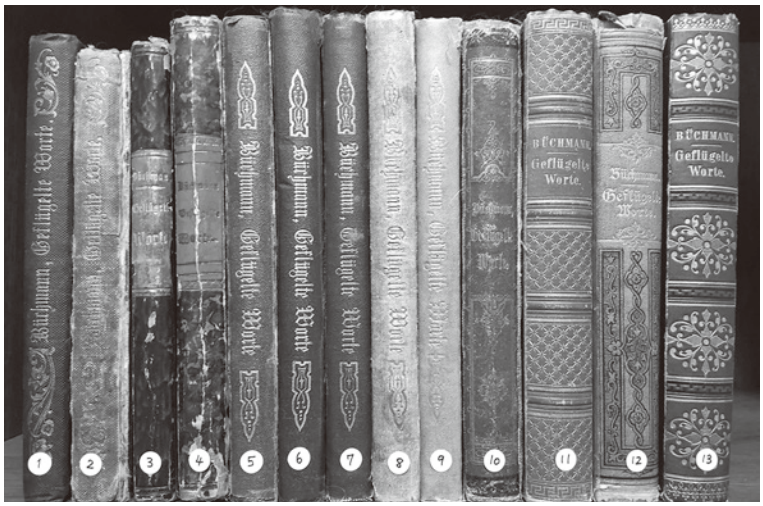

図 1　『翼のある言葉』初版～ 13 版

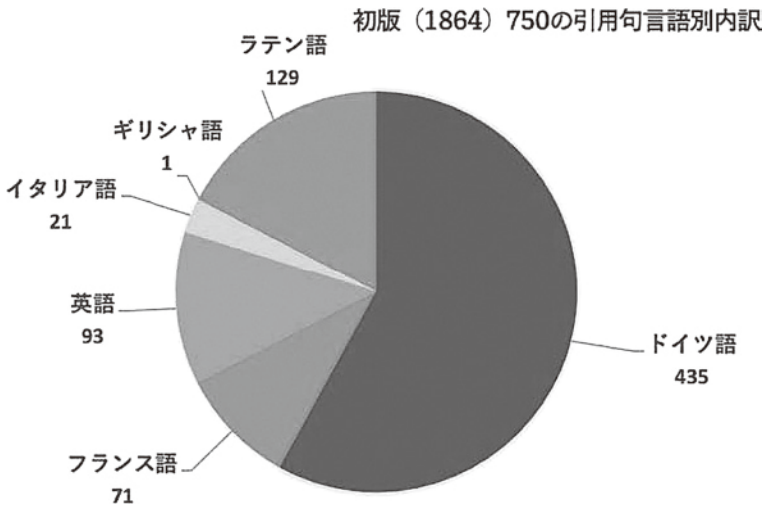

図 2　初版における言語別引用句数の内訳

ドイツ語の引用句が最も多く収録されているのは当然であるが，次いで多いのがラテン語，そして英語，フランス語，イタリア語の順で，ギリシャ語については初版では 1 つのみである。収録されている言語の内訳は初版から第 13 版まで際立って大きな変化はなく，ドイツ語とラテン語の引用句を中心に，総引用句数は改訂のたびにコンスタントに増えている（図 3）。

ところが，フランス語と英語の引用句だけに絞って見てみると，奇妙なことに，1868 年の第 5 版で突然減少している（図 4，図 5）。なぜだろうか。

その理由を探るには，第 5 版の冒頭に記された序文（Einleitung）におけるビュヒマン自身の証言に目を通すのみならず，彼が参考にしたとされるフランス語（フルニエ『他者の精神』と英語（I.R.P『家庭の引用句集ハンドブック』）の引用句集との関係にまで遡って考察

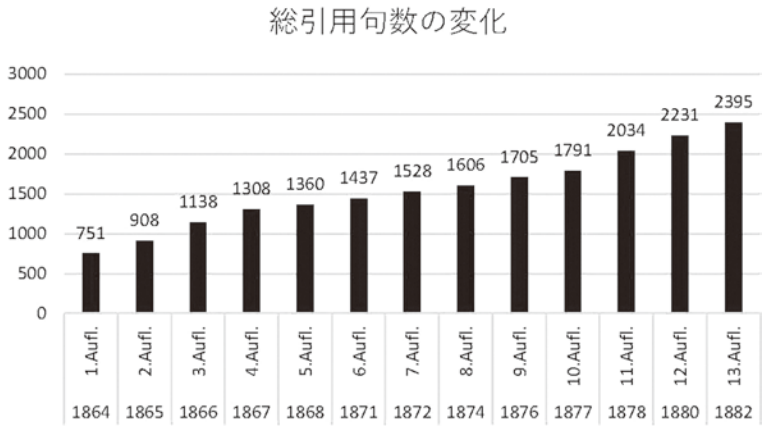

図 3　総引用句数の変化（初版～ 13 版）

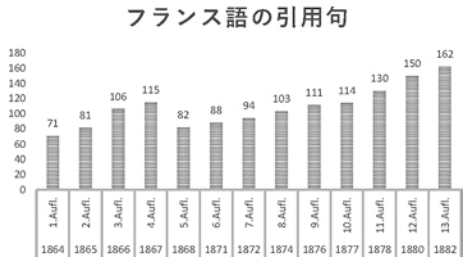

図 4　フランス語引用句数の変化（初版～ 13 版）

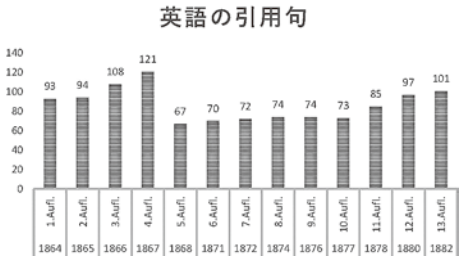

図 5　英語引用句数の変化（初版～ 13 版）

する必要がある。収録するフランス語と英語の引用句を選ぶ際に，ビュヒマンがこれらの書物を参考にしたことは間違いないからである。特に気になるのは，英語の引用句集の方である。というのも，フランス語のフルニエの著作については，ビュヒマン自身が『翼のある言葉』の中で何度か言及している。ところが匿名で出版された英語の『家庭の引用句集ハンドブック』については, ビュヒマン自身による言及は一つも見られない。この英語の書物がビュヒマンの仕事に影響を与えたことを証言しているのは，ビュヒマン自身ではなく，彼と親しかった人間たちなのである。 このことからも，『ビュヒマン』第 5 版での仏英の引用句の減少の理由の解明は，ビュヒマン研究にとって重要な課題のひとつであることがわかる。

III.　書評・手紙の収集と分析

改版のたびに行われたビュヒマンの地道な改訂作業は，読者とのいわゆる「協働作業」（Mitarbeiterschaft）に依る部分が大きいとされている。ここでいう協働作業とは，具体的には読者との手紙のやりとり，そして当時の文学雑誌や新聞に掲載されたこの書物についての書評のことである。『翼のある言葉』第 2 版の序文の中で，ビュヒマンは次のように述べている。

> この書が予想以上の好評を博し，ひと夏のうちに初版の在庫がなくなったので，世間からの批評や，有名・無名の支えてくださる方々の知的・学術的貢献をいただたい著者の義務として，ほとんどすべてのページに改良と追加を加えた。[…] この書への批評や一般の読者とともに，特上の協働作業を享受させていただけるならば，それは新鮮でやる気の出ることである。本書への寄稿に対して，ここに公に感謝の意を表し，今後の寄稿を歓迎するものである。[9]

[9] G.W. 2.Aufl., S.8f.

ここで初めて用いられている「協働作業」という概念こそが，ビュヒマンの改訂作業を特徴づける主要なキーワードであり，その後の彼の改訂作業にきわめて大きな役割を演ずることになる。ロベルト-トルノウもまた，ビュヒマンへの追悼の辞の中で次のように述べている。

> 彼は各版の「序文」で［読者に対し］加筆・訂正の協力を求めたが，このような文献学への訴えは，常にドイツ人の心の中に響く。1879 年 9 月 27 日，当時パウル・リンダウが編集していた『現代』という文学雑誌に，ビュヒマンは「600 人の通信者」という論文で，このような自発的な協働作業によって彼の引用句収集にもたらされた様々な利益に対し，感謝の意を表している。[10]

ビュヒマン自身の証言によると，1879 年の時点でビュヒマンに手紙を送った相手の数は 600 人で，『翼のある言葉』という書物に関して公けにされた書評は，その時点で 237 に上ったという。[11] 読者たちからの手紙による協力は，どのような経緯で始まり，その具体的なやりとりはいかなるものであったのか。また，手紙と並んで改訂に大きな影響を与えたと思われる数多くの書評（Rezension）では，この書物について何が論じられていたのか。これらの手紙と書評のうち，現存しているものを可能なかぎり集め，ビュヒマンの編集史と照合しながら，改訂作業への影響関係を考察することが 3 つ目の課題となる。

これまでに筆者が手に入れることのできたのはビュヒマンによる 60 通弱の自筆手紙，そして書評については当時の新聞や文芸雑誌を中心に，現時点でようやく 80 弱である。それらの内容とビュヒマンの改訂作業との両方を時間軸に沿って照らし合わせつつ，そこに見られる影響関係を探っているところであるが，書評や手紙の収集にはかなりの時間がかかる。テキストのデジタル化と文献収集のオンライン化が進むにつれて，ネット上で探し出せる文献の数も少しずつ増えてはいるが，当時の新聞・文学雑誌に掲載された書評を丹念に探し出す作業はそれほど簡単ではない。地道な収集作業がさらに必要であることは言うまでもない。

『翼のある言葉』第 2 版の序文でビュヒマンは，「修業中の人間はいつも感謝するだろう（„Ein Werdender wird immer dankbar sein.“）」という『ファウスト』第一部の道化のセリフを引用している。この言葉はビュヒマン自身の仕事を表現しているのみならず，ビュヒマン研究に携わるわれわれ自身の作業についてもあてはまるであろう。

---

[10] Robert-tornow : Nachruf.　In : *G.W.14.Aufl.,* S.X.
[11] Büchmann : Sechshundert Correspondenten., S.198.

おわりに

以上，伝記資料の再検討，初期の版の分析、とくに英仏の先行書との比較の必要性，そして書評・手紙が改訂作業に与えた影響という 3 つの視点から，ビュヒマン研究の諸課題を検討してきた。ロベルト-トルノウが依拠した 2 つの伝記資料については，ビュヒマン没時に書かれたネクロローグ（追悼文）を精査することで, その出典は明らかになっている。また，初期の版の分析と英仏の先行書との比較については，ビュヒマン自身が編集作業に関わった初版から第 13 版までのすべての版を入手し，その本文を文献学的に分析することで，『ビュヒマン』と英仏の先行書との関係も明確になりつつある。特に匿名で公刊された英語の引用句集は，ビュヒマン自身はまったく言及していない点できわめて興味深い書物なのでさらなる分析が必要である。最後に，読者との「協働作業」については，読者との手紙のやりとりおよび『翼のある言葉』に関する様々な書評（単なる新刊紹介から極めて学術的な批評まで，内容は千差万別である）が，ビュヒマンの改訂作業にどのような影響を与えていたのかについての検証も欠かせない。根気のいる地味な作業であるが，今後のビュヒマン研究では，これらの諸課題に時間をかけて取り組んでいく必要がある。

文献表（脚注で示したものも含む）:

Allgemeine Deutsche Biographie（ADB）Bd.47.（Nachträge Bis 1899.）Leipzig 1903, S. 322-326.
Archiv für das Studium der Neueren Sprachen und Litteraturen.（hrsg. von Ludwig Herrig.）XXXVIII.Jahrgang, 71. Band. Braunschweig 1884, S. 398-405.
Büchmann, Georg : Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Berlin 1864.
Büchmann, Georg : Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. 2.Aufl. Berlin 1865.
Büchmann, Georg : Sechshundert Correspondenten. In : *Die Gegenwart Nr.39. 1879*, S. 198-200.
Fournier, Edouard : L'Esprit des Autres. Paris 1857.（3.Aufl.）
Goethe, Johann Wolfgang von : Faust. Der Tragödie erster Teil. Tübingen 1808
Handbook of Familiar Quotations. Chiefly from English Authors. By I.R.P. A new edition. London 1853
Jahresbericht über die Friedrichs-Werdersche Gewerbeschule in Berlin, Berlin 1878
Neue Deutsche Biographie（NDB）Bd.2. Berlin 1955, S. 719.
Robert-tornow, Walter : Nachruf. In : *G. Büchmann : Geflügelte Worte. 14.Aufl. 1884*, S.V-X.

（さえき　けい　東北学院大学教養学部　教授）